

## 博報堂教育財団 第15回、16回「日本研究フェロシップ」

## 成果報告書

## I. 研究成果概要

氏名（フリガナ） 在住国名	吉田安岐（ヨシダアキ） フランス
所属・役職	パリ大学 講師 フランス東アジア研究所 研究員
招聘回（招聘研究期間）	第 16 回 （2021 年 9 月 1日～ 2022 年 2月 28日）
受入機関	早稲田大学
招聘研究テーマ	60年代、70年代初期における日本の作家とアジア・アフリカの作家との文学的交流、又同時期日本におけるアジア・アフリカ文学の受容
研究目的	アジア・アフリカ作家会議への日本作家の関わりを調べるとともに、当時日本でどのようなアジア・アフリカ文学作品が紹介され、どのように受容されているかを調査する。
研究成果概要	
<p>1. どのように研究を進めたか（具体的に）</p> <p>主に、早稲田大学図書館、国立国会図書館において、文献調査を行った。</p> <p>第一に、アジア・アフリカ作家会議への日本作家の関わりを調べるために、国際大会の報告・記録（雑誌『新日本文学』『文化評論』、アジア・アフリカ作家会議日本協議会会報『アジア・アフリカ通信』誌上に掲載）や参加者の非公式記録（上記の刊行物に加え、種々の文芸誌や一般誌に掲載）を確認・調査した。また、アジア・アフリカ作家会議に関わった作家らの日本での活動を把握するために、アジア・アフリカ作家会議の日本での組織が刊行していた出版物（『アジア・アフリカ通信』、『AA月報』『季刊aala』）を調査した。</p> <p>第二に、1960年・70年代のアジア・アフリカ文学の翻訳状況をできる限り網羅的に調べた。国立国会図書館のデータ・ベースを活用し、雑誌掲載・単行本刊行された翻訳を調べるとともに、先述の資料などで得られた情報をもとに、データ・ベースに詳細記載がない雑誌上での翻訳作品も調査した。</p> <p>最後に、受け入れていただいた鳥羽耕史先生の紹介で、明治大学の竹内栄美子先生と面会し、先生が個人的に所蔵されている日本アジア・アフリカ作家会議関係の資料も閲覧させていただいた。</p>	
<p>2. 研究によりどのような知見が得られたか（具体的に）</p> <p>アジア・アフリカ作家（以下A・A作家）会議への日本作家の参加状況が詳しく把握できたとともに、以下のような日本国内での活動をしていたことがわかった</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● A・A作家に関する日本人の理解を深めるための勉強会や講習会の企画</li> <li>● A・A作家会議の精神にそった各種活動（部落解放運動、ベトナム戦争反対集会など）</li> <li>● A・A作家が来日した際の講演会・交流会の企画（例 1970年の南アフリカの詩人マジシ・クネーネ、1975年のインドの詩人スバス・ムコパディーエの来日）</li> <li>● 日本での国際会議・シンポジウムの開催（1961年「東京緊急大会」1974年「日本・アラブ文化連帯会議」）特に、後述の会議の際は、アラブ作家と日本作家が在日朝鮮人問題、部落問題、沖縄問題などについて意見を交わす機会を持った点で重要である。</li> </ul> <p>A・A作家との交流は、すでに研究が進んでいる堀田善衛や大江健三郎といった作家だけでなく、中藪英助、竹内泰宏といった作家の個人創作に影響を与えたことがわかった。</p>	

翻訳に関しては、1950年代後半から、『新日本文学』、『詩人会議』などの紙面でアジア・アフリカ作家の翻訳作品紹介が試みられ、また単行本でも「世界革命文学選」などで翻訳作品が刊行され始めた。60年代の全体的な状況として、重訳が多く、特に初期の翻訳はアジア・アフリカ作家の翻訳が進んでいた中国語・ロシア語翻訳をベースにしたものが多いことがわかった。又同時代において、アジア・アフリカの文学は安保闘争や、ベトナム戦争といった時事状況に合わせて読まれ、「革命文学」や「抵抗文学」といった紹介をされたこと、また掲載された媒体からも、読者層が限られていたことがわかった。その状況が徐々に変化し、70年代には翻訳される作品の多様化、掲載媒体や単行本として刊行される場合の出版社の多様化が見られ、アジア・アフリカ作家・文学の認知が出版界・読者共に徐々に広がっていったことがわかった。

### 3. 研究成果（予定を含む）

○論文（題目、掲載誌、発行者、掲載月、内容の概略（200字以内））

・「Traduction des auteurs africains au Japon dans les années 1960（1960年代のアフリカ作家の日本での翻訳）」共同著作『Circulations littéraires afro-asiatiques : écrire, publier et traduire après Bandung（アフリカ・アジアにおける文学の流通 —バンドン会議を経て執筆し、出版し、翻訳するということ）』インド・オセアニア大学出版 2022年出版予定

○口頭発表（題目、イベントの名称、日・場所、内容の概略（200字以内））

・「Traduction des auteurs AA dans les années 1960（1960年代のアジア・アフリカ作家の翻訳）」パリ大学の研究グループ「Pratiques trans-linguistiques : du rôle social de la traduction 言語を越える行為：翻訳の社会的な役割」の定期講演 1月28日 オンライン開催

発表要旨：日本でのアジア・アフリカ作家の初期の翻訳が、原文へのアクセスの困難さや専門家の不在といった状況にどのように対応しながら行われたのかを発表した。特に、中国語・ロシア語からの重訳の例を上げ、当時日本で紹介されたアジア・アフリカ作家像が、中国・ロシアでのAA作家像に影響されていたことを明らかにした。

・「日本でのアジア・アフリカ文学の受容 — 1960・1970年代の翻訳を通して」第13回国際フォーラム「越境する人文知」早稲田大学 2月9日 オンライン開催

発表要旨： 同上

・「Towards the construction of a new common knowledge of literature: The Translation of Asian and African Writers in Japan from the 1950s to the 1970s（新しい文学財産の構築へ：日本での1950年から1970年にかけてのアジア・アフリカ作家の翻訳）」東アジア翻訳学第4回国際学会「The Fourth East Asian Translation Studies」6月30日から7月2日 パリ大学

発表要旨： 西欧文学が主導権を握り評価基準を構築している世界文学の中で、独自の流通形態・評価機構を作り、新たな文学モデルを提示しようと試みたのがアジア・アフリカ作家会議の一つの功績であった。その中で日本作家の果たした役割について、雑誌『Lotus』の編集への取り組みや、日本国内のアジア・アフリカ作家の翻訳、アジア・アフリカ作家へのサポートなどを取り上げることで明らかにする。

### 4. 今後の活動予定

・今回の研究で入手できた資料を読み込んで行くとともに、英語・仏語圏で進んでいるA・A作家会議に関する研究を視野に入れ、A・A作家会議の国際舞台での日本の役割をさらに検討する。同研究成果を発表する場として、アジア・アフリカ作家会議と日本作家（特に大江健三郎）の関わりを研究しているアメリカのChristopher Hillや、同会議とトルコ作家の関係を研究しているフランスの研究者Noémie Cadeau

等と共に国際的な研究発表の場を設けたい。

・中藪英助や竹内泰宏の作品分析・作品受容の分析を通して、A・A 作家との交流が日本の文学界に与えた影響を検討していきたい。その際、日本での黒人文学の受容とアジア・アフリカ作家の受容の関係についてさらに考察を深め、日本の学術誌（「JunCture 超域的日本文化研究」など）に発表したい。日本における黒人文学の受容に関しては英語圏で研究が進んでいるため、ミネソタ大学の Yuichiro Onishi や今回の滞在で交流することのできたコロンビア大学の Deanna T. Nardy との共同研究も視野に入れて研究を進めていきたい。